

についてはクラミジアの活動性感染（頸管腔炎）が示された。

5) 小児の血液透析例における Flomoxef の体内動態

笹川富士雄・中野 徳
奥川 敬祥 (水原郷病院小児科)

オキサセフェム系抗生物質 FMOX の小児の血液透析例における体内動態を検討した。

1. 小児の慢性腎不全血液透析例5名に FMOX を 10mg/kg, そのうち2名に 5mg/kg を1回静注し, その血中濃度, 尿中濃度を経時的に測定し, two compartment open model による薬動学的解析も行なった。
2. 血中濃度は 10mg/kg, 5mg/kg でそれぞれ平均値, 30分値 33.3, 17.6, 1時間値 29.6, 15.9, 2時間値 27.2, 15.1, 4時間値 23.5, 13.0, 8時間値 18.9, 11.0, 24時間値 9.64, 6.16 μ g/ml であった。
3. 10mg/kg 投与時の尿中濃度は 0~6時間で40~120, 6~24時間で15~50 μ g/ml, 尿中回収率は透析期間が1年未満の例では24時間で8~9%であった。
4. $t_{1/2}(\beta)$, AUC は 10mg/kg 投与時でそれぞれ平均値, 10.03, 616.5 であった。
5. 以上より, FMOX の投与量は1日1回 10mg/kg で十分であり, 起炎菌によっては 5mg/kg でも治療可能と考えられた。

6) コンタクトレンズ保存液より naegleria が検出された難治性角膜炎の1例

大島 晃・本山まり子
田沢 博・坂上富士男
大石 正夫・大桃 明子 (新潟大学眼科)

症例は25才女性で, ハードコンタクトレンズを装着していたが, 平成2年1月10日より左眼視力低下, 眼痛のため近医にて抗生剤の投与を受けていたが, 左眼の角膜浮腫と混濁が増強し, 平成2年1月24日当科へ紹介された。初診時, 左眼視力0.02, 水疱性角膜炎と樹枝状角膜炎様の所見を認め, 角膜裏面に半透明円形沈着物を認めた。眼痛は軽度であった。抗ヘルペス剤及びステロイド剤を投与したが, 症状悪化したため, 2月1日より0.1%ミコナゾール点眼, 結膜下注射を行った。裏面の綿花様浸出物は消失したが, 小円形沈着物の形成を認めた。3月1日コンタクトレンズ保存液より細菌とアメーバの一種である naegleria が検出されたため, 3月8日よりミコナゾール点滴施行, 3月16日より0.1%アンホ

テリシンB点眼開始した。角膜の浮腫は徐々に改善し, 視力も6月現在0.8まで向上した。

コンタクトレンズ保存液よりアメーバの検出された難治性の角膜炎を報告した。

7) 慢性化膿性中耳炎に対する抗生物質併用点耳療法 of in vitro での研究 (黄色ブドウ球菌および緑膿菌に対するホスホマイシン, ジベカシン併用療法の評価)

田中 久夫 (厚生連中央総合病院耳鼻科)

慢性化膿性中耳炎の耳漏から検出された黄色ブドウ球菌7株, 緑膿菌8株を用い, Checkerboard titration method により, FOM と DKB の併用効果を測定した。

〈結果〉どの株も FIC index は 1.0 以下で併用効果を認め, 1.0 未満 0.5 以上のものが 4 株, 0.5 未満 0.2 以上が 6 株, 0.2 未満が 5 株であった。特に 0.5 未満の強い併用効果をもつものは 15 株中 11 株 (73%) で菌の種類別の併用効果を比較してみると, 黄色ブドウ球菌の FIC index の平均が 0.345, 緑膿菌の平均が 0.309 となり緑膿菌の方がやや併用効果が強い傾向にあった。しかも, 両者は非常に安定な物質で, 混ぜて長時間水解した状態でも使用可能と思わる。一方, アミノ配糖体系抗生物質の腎毒性は FOM を併用する事により軽減される事は知られており, 最近では, 聴器毒性も軽減する可能性がある事が示唆されており, まさに FOM と DKB の組み合わせは, 併用療法としては理想的な組み合わせといえる。

8) カンジテックの診断的意義

鈴木 紀夫・川島 崇
和田 光一・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

近年, 増加しつつある深在性真菌感染症, 特にカンジダ感染症の血清学的診断法を検討した。カンジダ抗原は, RAMCO 社製の「カンジテック」を使用し, カンジダ抗体は, ROCHE 社製の「カンジダ PHA テスト」を使用した。正常人におけるカンジダ抗原陽性率は, 0.6%, カンジダ抗体の陽性率は, 2.0% であった。カンジダ感染確実群におけるカンジダ抗原陽性率は 78% であり, カンジダ感染のなかった患者群の 1.7% に対し有意差を認めた。カンジダ抗体のカンジダ感染確実群における陽性率もカンジダ感染のなかった群に対し, 有意差を認めた。カンジダ抗原とカンジダ抗体の陽性率はカンジダ感